

# 淨土宗義と曇鸞教義

千賀眞順

- 一、序 說
- 二、傳 燈 論
- 三、教 判 論
- 四、聖 典 論
- 五、本 願 論
- 六、佛 土 論
- 七、信 行 論
- 八、結 語

## 一、序 說

淨土宗義の成立は宗祖の人格思想信仰に基く教團の生活様式に依て基礎付られるものである。故に淨土宗團成立當初の情勢に遡て教義として纏められた宗團の指導原理として淨土宗の生活様式は專修念佛である。即ち南都の奏狀にも「念佛の宗を立て、專修の行を勸む」として專修念佛こそ淨土宗義の特相とすることに就て種々に論議されてゐる。こ

の專修念佛は言ふまでもなく善導大師の觀經疏の文に依り末代の凡夫が彌陀の名を稱ふることによつて本願に助けられ往生淨土の目的を達することが出来るとの信仰より立教された宗祖の已證であると言はねばならない。而も

「我身は戒行に於て一戒をも保たず、禪定に於て一もこれを得ず、智慧に於て斷惑證果の正智を得ず、この三學の外に我心に相應する法門ありや、我身に堪へたる修行やある。(全集355)

と言ひ、或は

「源空の目には三心も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛、五念も南無阿彌陀佛なり。」(全集530)

との但信口稱の一行三昧のうちに、念戒一致して佛道の現成へと進み行く生活が戒行の眞意である。この高次のな專修一行による生活の統一をその目標として、往生淨土、凡入報土を目指してゐるから宗義の特相はこの專修念佛と凡入報土の二要素でこれこそ宗義構成の綱格である。この宗義の成立をしてかくあらしめた背景たる時代的社會的諸状態を眺めると成程と首肯せしめるものがある。宗祖の時代は濁亂不安の時相で正に保元、平治、承久と打續く兵亂、火災、饑饉、天災等の悲惨事の連續である。こゝに現世利益を希求する人心に迎合して祈禱佛教が卑俗な祭祀主義になり、且つ僧風は墮落して五濁惡世と歎せしめ、世は澆季、法は末法、人は全く去就に迷ふのみとなつた。都佛教も山佛教も全く形式化して徒に教理の深遠な觀念論となり無力になり果てた。淨土宗はこゝに誕生すべき運命を持ち人心に明るい希望と安定を與へ人生を調整してその歸趨する所を指示したものである。その主なる點は時機相應・機教相應として澆季の新佛教としての救濟道を説き、僧俗の區別を捨て、民衆の精神的要求に應じて信仰事實を重視し、念佛の信行に依て人生の目的を標示し意義づけることゝなつた。

かくて淨土宗是は從來の成佛論、佛陀論、自力修道論より新しき往生論、本願論、他力念佛論へと展開して來た、これは正しく宗祖の時代社會の見極めより出でたる淨土宗義ではあるが、その宗義の依て以つて立つ所、勿論偏依善導にあるは明かであるが、更に遡て本年千四百年の遠忌に相當する曇鸞教義にその要素を見るのみならず、恐らくは鸞師を祖述する道綽、道綽より受教せる善導と淨土教義は展開し擴充し組成されてゐるが、淨土宗義史上始祖と仰ぐべきは曇鸞法師である。勿論時代を異にし所を異にし之を同日に談じ得ないが、淨土宗義發展の内面的考察よりすると、鸞師淨土教の後世支那日本淨土教義上に及ぼせる影響は看過し得ないものがある。以下曇鸞教學と淨土宗義の考察の概要を述べんとするものである。

特に注意さるゝ曇鸞教義の特相は無量壽經に依る本願力發見より往生淨土を鼓吹しその生因として心無他想的念佛にあることを強調してゐる。即ち「但以信佛因緣願生淨土乘佛願力便得往生彼清淨國土佛力住持即入大乘正定聚」と言へるは論註全體の根本要旨でこゝに淨土宗義の始源が窺はれる。併し曇鸞淨土教義の時代環境の背景は宗祖のそれといさゝか趣を異にするから未だ宗祖の如き純正な宗義の體系は見られ得ない。先づ

鸞師當時の時代觀を考察するに、羅什門下僧叡は成實論序に羅什の語として佛滅後三百五十年馬鳴出世、五百三十年龍樹出世、馬鳴は正法の末に興り龍樹は像法の初めに起るとして羅什、道安、慧遠等を像法人師の代表とし未だ明な末法觀は見られない。但だ南岳慧思の立誓願文に「正法五百年像法一千年末法一萬年。」として法滅の次第を叙してゐる。併し末法の考察は隋に至て遽に起り唐に至つて喧しく言はれたもの故、末法觀を基礎となせる淨土教も鸞師に於ては明に末法を言はない、併しその教義を考察する時、龍樹易行品の説を引き、菩薩が不退轉を求めんとするの

難易二道の道を立て、その中五濁の世、無佛の時に於て不退を求めるのを難行道とし信佛の因縁を以て淨土に生じ佛力に住持せられて大乘正定聚に入るを淨土易行道と名付けしは明に末法觀に非ざるも五濁惡世の時代觀を反省せるもので淨土宗義背景と相連關するものがある如きである。以下項を分ちて兩者の關係を明にして淨土宗始祖として尊崇されて然るべき所由の概要を述べることとする。

## 二、傳 燈 論

淨土宗成立の傳燈的基礎は佛典上の典據たる聖典論、教理の理論根據たる教判論と共に宗義の前提的必須條件と言はねばならない。即ち宗祖が淨土宗獨立の宣言をなされて、念佛信仰が隆盛に向ふに従ひ、諸宗の批議する所となりそれが具體化して大原問答となり、東大寺十問答となつて反駁宣明されたと言へる。惟ふに宗祖の開宗は強い不退轉の信仰體驗によつてゐるから所謂形式的傳承は不必要とも言へる。併し當時の時代背景は淨土寓宗であり、「源空は傳燈の大祖なるか。」(興福寺奏狀)と言ふ如き諸の批議に答へる爲め偏依善導と主張され、更に支那淨土教の傳承系統を立てられた。即ち支那淨土教の五祖を選定して鸞師以下を明示され、正しく鸞師を淨土宗義上の始祖として之を尊崇されてゐる。即ち選擇集第一章に三種の傳承を立て、ある。第一に廬山慧遠流として佛圖澄、道安、慧遠、第二に慈愍三藏流として觀音相承せる慈愍の淨土教、第三に道綽善導流として安樂集に依る菩提流支、惠寵、道場、曇鸞、大海、法上を擧げ、唐宋兩高僧傳に依る菩提流支、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康を擧げ、この後者を以て淨土宗正統相承とし震旦の五祖としてゐる。(西宗要第四にも詳説す) 且つ印度の馬鳴、龍樹、天親を加へて淨土宗の傳燈相承

とされてゐる。菩提流支の淨土系統及び流支より鸞師への觀經(往生論)授受に就ては不明にして疑點が存する。即ち流支の淨土系統は不明であるが、その所譯の論部中天親のもの多く、從て天親教學に精通せることは明であるが論註に流支の譯語を批難してゐる所より考察すれば望月博士も指示されし如くその受教の師は道場であらうと推定されるのも首肯される。(支那淨土教理史<sup>72</sup>)何れにしても鸞師は四論を深く研究して龍樹に私淑し「南無慈悲龍樹尊、至心歸命頭面禮」と讚仰され、論註は天親の往生論註解であり、且つその精力を集注してあるから鸞師は龍天二師の思想傳承者である。從て宗義史上淨土思想の始源を支那に求める限り始祖の地位にあると言はねばならない。

### 三、教 判 論

淨土宗成立の理論的根據即ち本宗の教判論は諸宗の教判と異つた立場と根據とを持つのである。即ち普通釋尊教説の價値を批判する天台の五時教判等でもなく、教理の淺深優劣をのみ論判する華嚴の五教十宗、天台の四教義八教判等と全然立場を異にする特色ある教判を用ひられた。勿論本宗教判の構成には從來の教判を用ひ或は從來の教判に負ふ所も認めらるが、宗祖が主として用ひられたのは道綽禪師の聖道淨土の二門判、鸞師の難行易行の二道門で何れも淨土教獨特の特色を有してゐる。この二教判の中聖道淨土の二判は選擇集開卷第一章に「捨聖道歸淨土之文」として諸宗の教判を盡く批判して時と機と教の三者が相應するものこそ往生淨土の道で人間の此土入聖の觀念を排斥し、飽くまで現實の自己と社會を眺める時、佛の本願に依て助けられ念佛して眞實道の信仰を持つこそ人間の現實相應の修道である。正に聖道門は難行、自力個人的、淨土門は易行、他力利他的なりとされてゐる。この聖道淨土の二門批判

を難行易行の二道門とされてゐる。故に宗祖は鸞師は綽師の聖淨批判と共に二道門を多く用ひられてゐる。即ち鸞師が論註上に龍樹の十住毘婆娑論を引て

「一者難行道二者易行道難行道者謂於五獨之世於無佛時求阿毘跋致爲難此難乃有多途乃至唯是自力無他力持譬如陸路步行則苦易行道者謂但以信佛因緣願生淨土乘佛願力便得往生彼清淨土。」(淨全一、219)

と言ふて聖道淨土の理由を明して、往生淨土の易行道こそ、上衍の極致、不退の風航也と強調してゐる。而も鸞師は難易二道判は淨土と穢土に對照して分判せられ、こゝに淨土教義が成立する故、龍樹の二道判と趣を異にしてゐる。のみならず龍樹の易行は彌陀一佛と信受し、こゝに自己の願生西方の信念を確立せしものと想定される。このことは淨土教思想史上一大飛躍で淨土宗義史上始祖たる思想者であると言はねばならない。

#### 四、聖典論

淨土宗の證權的聖典は正しく淨土三經である。しかも宗祖の觀方は「各宗に一切經あり」、天台宗の一切經では法華經、華嚴宗では華嚴經、三論では般若經、法相宗では解深密經を以て究竟眞實とする。本宗では往生淨土の教説の立場より諸經論を選択批判して正依三經一論の規定をせられた。即ち古來より「總依一代諸經、別依三經一論」と言ふ證權論が本宗獨特のものにして注目される。即ち宗祖は選擇集に三經共に諸行中に念佛を選択する旨を明して、大經に本願、讚歎、留教の三選擇、觀經に攝取、化讚、付屬の三選擇、小經に選擇證誠があり、般舟三昧經による選擇我名と共に選擇本願念佛の無觀稱名に依る往生淨土を説示するものとされてゐる。更に本宗の特色としては、支那に於

ける經論の註釋書を重んじたことで、宗祖も幾多の著作を論據とされてゐる、即ち鸞師の論註二卷等、道綽の安樂集、導師の觀經疏、懷感の群疑論、法照の法事讚等である。中に就て觀經疏は一宗の指南として御書として偏依されてゐる。これ三階教並に道綽禪師の高く掲げ宣揚したことによるが、正に末法時初期に出世した導師であるから、五念止觀業を止揚して念佛正定業の五正行を規定せられ安心起行作業の綱格が立案せられ、之に基て宗祖の新宗義が宣揚されてゐる。故に鸞師教學に於て未だ末法時に非ず、末法佛教とは言へないが、像法終末に當りかつ三階教等の影響ありてか末法觀が動いてゐると言へる。即ち大經に「當來之世經道滅盡我以慈悲哀愍特留此經止住百歲」の教説により衆生效濟の教であるとしてゐる。恐らく鸞師の深く菩提流支より所謂觀經と言ふも恐らく往生論であろうが、それに依て入淨し自己の淨土教を確立されたものは三經であると言へる。即ち淨土教傳承上、三經所依の意が顯はれてゐるのは天親の往生論第一に「我依修多羅眞實功德相說願偈總持與佛教相應。」(淨全一、191)とある。鸞師は正しくこの修多羅眞實功德相の修多羅は往生論にして三經通申の意なりと想定され三經の根本主體を論じて名號なりと斷定されてゐる。即ち論註に

219

「無量壽經安樂淨土如來名號、釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國於大衆之中說無量壽佛莊嚴功德即以佛名號爲經體。」(淨全一、  
とあるのがそれである。これに依て明瞭に往生論が三經に基礎付られてゐると見られ三經の文を註に引用されてゐる。即ち註下の善巧攝化章に大經三輩の發菩提心を引用して信心也など隨所に釋せるものがそれである。その中特に注意すべきは論註に

「應知三種莊嚴成就由本四十八願等清淨願心之所莊嚴因淨故果淨非無因他因有。」(淨全一、230)

と言ふ。これ三種莊嚴成就を四十八願の清淨願心に基くとせらる。更に

「所言不虛作住持者依本法藏菩薩四十八願今日阿彌陀如來自在神力願以成力力以成願願不徒然不虛假力願相符畢竟不  
至故曰成就。」(淨全一、247)

と言ふて本願力を強調し、衆生往生は畢竟この本願力に依るとして五念門の行を修して自利々他し速に阿耨多羅三藐三菩提を得ることは「皆緣阿彌陀如來本願力故」と言ひこの本願力の思想は正しく三經に依て信受し體驗せられたものである。

## 五、本願論

淨土宗義上、本願は彌陀が成佛理想の下に願を起し理想實現の爲めの修道即ち六度萬行を兆載永劫に成就し建設して衆生救濟の本願を立てると言ふのは、衆生生具の願望の實現意志を彌陀成佛の上に具象せしめたものである。こゝに吾人をして理想的生活の社會環境に趣入したいとの欲望を持たしめるに役立つのである。宗祖も

「阿彌陀佛の酬因感果、極樂淨土の二報莊嚴を明す、これ衆生の願樂の心を發さしめんが爲なり。」(全132)

とある。こゝに彌陀は四十八願を發して西方に極樂淨土を構へ、念佛する衆生をその上に救ひとり給ふのであると言ふのは、衆生の眞實生活への飛躍を望む心を満足せしめる爲に積極的に働きかける温い動きであり、その佛土は眞實にそこに攝取せられんと願生心を發さしめる莊嚴なのである。故に淨土宗義上、成佛國土の誓願満足の後は衆生攝



受の本願論のみが働くとする所に佛陀論より本願論への轉向が注目される。かくて宗義上、四十八願中、特に第十七諸佛稱揚願、第十八念佛往生願、第十九來迎引接願、第二十繫念定生願の四願が中心となり、特に第十八願が三心具足の稱名念佛を眞實生因と選取せるもの、生因本願、王本願と稱せられ全誓願の歸結と見るのである。こゝに眞實の所求、所歸、去行を統攝して結歸一行三昧の念佛義が提唱せられる、かゝる純正な本願念佛の統攝は宗祖に依て體系付られたものであるが、惟ふに淨土教史上彌陀一佛歸依を信仰し、願生西方の信仰を確立せしものは正に鸞師であつて、念佛修道に依る菩提證得は全く本願増上緣力に依る旨を強調され體信してゐる。佛力住持の有無如何によつて難易二道を分つこと全く本願の他力によるとしてゐる。而して宗義上第十八願中心の四願強調が見られず、鸞師に於ては三經と共に龍樹の示教に依りて、特に第十一住正定聚願、第十八念佛往生願、第二十二早作佛の三願を強調してゐる。之に依て淨土に往生し及び不退を得、又速に成佛することが出来る論證としてある。これは龍樹の感化により不退の問題より出發し早く作佛を得んことを目的とし、その爲めには先づ以て第十八念佛往生の願に依らねばならないとしたものであらう。この邊に宗祖の純正な本願觀とはいさゝか趣を異にするが、易行道は佛の願力に乗じて淨土に往生し佛力住持により成佛し得るとして後世に及ぼせる影響多く本願信仰史上の注目すべき展開であると言へる。

## 六、佛 土 論

淨土宗義は、淨土信仰に基く念佛信行を内因とし、佛の大願力を外緣として報土に往生する義を明にしたもの、その報土に或は三輩九品を分別するが、これは信行により樹てられた往生人の生活を類別したものの、從て報土は生活相

異なるも眞實生活者としての一味平等の理想であらねばならない。教理發展の上よりすれば所謂西方樂土と信受され勝ではあるが、要は亂想の下愚衆生をして讚仰せしめ願生せしめて、そこに攝受せん爲めに示現された相と見るべきで人間の生の歸趨すべき方面を指示して眞實生活の理想的社會相を構立したものである。

「われ淨土宗を立つる心は凡夫の報土に生まることを示さんが爲めなり。」(金、823)

とは宗祖以前の形式的儀禮的第三人稱的佛教に反して、凡聖同願同證ある淨土立宗の意義が理解され把握されねばならない。報土往生は吾人衷心の希求する生活理想である。衆生の待望し且つその實現招來を期すべきであるべき人道社會である。従て之に方向付けることに依て、人生を價値あらしめ飛躍せしめることが宗祖の

「生けらば念佛の功つもあり、死なば淨土にまゐりなんどもかくてもかくても此身には思ひわづらふことぞなき。」(全集534)

の念佛生活が宗義の要請する所である。

鸞師教學に於てはその時代の上より眺めるも、未だ佛身、淨土の分類等が論ぜられてない、従て報化等の名を擧げない。併し論註に

「指法藏菩薩集諸波羅蜜積習所、或亦言性者聖種性、序法藏菩薩於世自在王佛所、悟無生法忍、爾時位名聖種性、於是性中、發四十八願大願、修起此土、即曰安樂淨土。」(淨全一、223)

とあるは彌陀を報身、その土を報土としたものである。且つ往生論等に依て淨土を出過三界の處とするのも明であり且つ凡入報土の義も認められる、即ち論註上卷に天親の廻向門の「普共諸衆生、往生安樂國」を釋して無量壽經第十八願文、及び觀經下々品の文を引用して之を示してゐる。即ち

「明知下品凡夫但令不<sub>レ</sub>誣<sub>二</sub>謗<sub>一</sub>正法」信佛因緣皆得<sub>レ</sub>往生。」(淨金一、235)

と言ふ。而も鸞師の往生觀に就ては二種あり、三世虛妄の生、無生の生として特に後者を力説されたやうである。併し上根上智は無生の本義を諦めるが下根下劣のなし得る所でない、要は本願力に支持されて無生の本義に契ふべき所由を示して淨土宗義上に於ける本願往生の特相を教へられてゐる。これ宗祖は素直な往生の表現をとられたが、生死超絶の大願力に依る無生の法味を内に秘められて立義されてゐることに注意しなくてはならない。

## 七、信 行 論

淨土宗行者の信行に就て先づ信は念佛生活への態度にして行に現はれると否とに依て總別の安心を區別する、總安心は淨土教へ歸依する心構へであり、別安心は念佛生活に對する心構へである。總安心に菩提心と厭欣心を立て、別安心は所求・所歸・去行に對しての心的態度で至誠心・深心・回向發願心で即ち三心でこれ念佛生活に目覺める心である。至誠心は内外相應即ち内外俱實の身口意の三業を推進することである。深心に信機・信法を分ち、信機は社會的存在としての個的生命の劣惡さを信じ念佛生活に大悲の攝取が成就することを確信する、大經に「矯慢弊懈怠<sub>三</sub>以信<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>」とありて眞に謙虛な態度となる時開け來る永遠の救濟道の信仰である。略言すれば淨土往生の信仰こそ一切が救はれる所以の金剛の確信に立て熱情をもて往生を願ひ、凡ゆる實踐の効果を淨土往生の爲めに捧げるこれ回向發願心である。かゝる宗祖の三心釋は導師の指南に基くであらうがこの淨土信に相應する淨土行者の實踐行は口稱念佛である。即ち淨土宗の念佛生活の様相は宗祖に依て口稱念佛による統制された往生行の生活であることは言ふま

でもない。即ち和語燈錄に

「現世のすぐべき様は念佛の申されん様にすべし、……衣食住の三は念佛の助業なり、それ即ち自身安穩にして念佛往生をとげんには何事もみな念佛の助業なり。」(全、545)

と言ふ生活様式の規定である。この宗祖の念佛生活様式はその已證法門であると共に導師に隨順されしもの、遡りて鸞師の五念門生因説を基調とせること可言へる。併し鸞師に於ては未だ分明な導空兩祖の如き信行の分科を見られない、否可成趣を異にするものではあるが、論註讚歎門下の三信三不信説は明に安心に當り、止觀並に菩提心を中心とする五念門こそ淨土正因の信仰である。即ち鸞師が佛の本願力を強調せる結果淨土往生が第一目的となり、従てその行法として論の五念門即ち禮拜、讚歎、作願、觀察、回向の五を立て、修道としてゐる。

先づ禮拜門は願生心を以て彌陀を禮拜し、讚歎門は盡十方無碍光如來の名を稱するのである、如實に修行して名號の義に相應すれば、無明の黒闇は破れ一切の志願は滿ぜられるが、衆生が稱名憶念しても志願が滿足されぬのは三種の不相應があるからだと言ふ。即ち論註に三不信を擧げて

「有三種不相應、一者信心不淳若存若込故、二者信心不無決定故、三者信心不相續餘念間故、此三句展轉相成以信心不淳故無決定、無決定故念不相續、亦可念不相續故不得決定、信心不淳。」(淨全一、238)

と言ひ、「與此相違名如實修行相應」として信心淳、信心一、信心相續の三を具足して信心が決定相續すれば如來の名號の義に相應して能く無明の黒闇を除き一切の志願を滿するものとしてゐる。この説は後導師の安心釋となり、更に宗祖の「念佛行者必具三心」説となり宗義上の要旨となる、かゝる讚歎門の解釋は鸞師獨特の見解にて信心

正因説の基源をなすと言へる。次に作願門は一心專念に往生せんと作願し、如實に奢摩他即ち止(止惡)を修行すべきであり、これは如來の如實の功德より生ずるものとしてゐる。觀察門は正念に三種二十九種の莊嚴を觀察して往生論に基き如來の功德を得て往生し平等法身を證得することが出来ると言ふのである。又廻向門に於て往相還相の二義を立て然もこの廻向心は大經三輩生の中の無上菩提心を指すので、無上菩提心は即ち願作佛心、願作佛心は即ち度衆生心、度衆生心は即ち衆生を攝取して有佛の國土に生ぜしめんとするのであるから、淨土往生を願するものは必ず菩提心を發すべきであると言ふ菩提心正因説を強調してゐる。鸞師はこの菩提心の向上を明すと同時に又三信を強調するのである。それと共に淨土三經の所詮が名號であり、或は「但稱名號二十念相續」して業事成辦すると言ふ様に五念門の外に第十八願文及び觀經の下々品の文に依り憶念の十念を以て十念業成を説いて名號を稱するものも亦是の如しと念無他想の十念を強調してゐる。

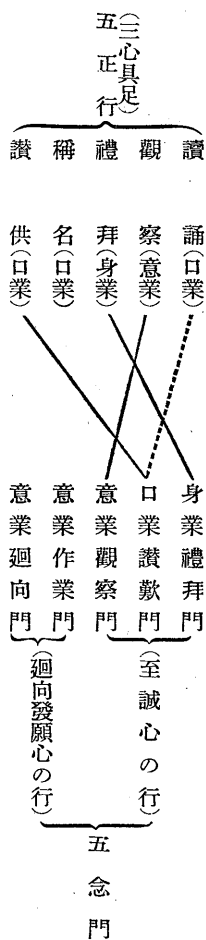
鸞師が名號を重んぜられたことは、讚歎門下の如來の名號がよく一切の惡を止むと云ひ、又論註下に

「若人雖有無量生死之罪濁、聞彼阿彌陀如來至極無生清淨寶珠名號、投之濁心、念念之中罪滅心淨即得往生。」(淨全一、246)

と言ひ、又論註上讚歎門下に如來の名號は名言そのものに法體が相即してゐるから即ち不思議の功用がある。一切の志願を満足させる義があると言ふ名體相即説を強調し以て極めて稱名を重んじてゐる。而もその稱名は唯だ一心不亂に他事を緣せず積念相續さへすればよいとしてゐる。選擇集卷末の總結文に

「夫欲速離生死二種勝法之中且闍聖道門、選入淨土門、欲入淨土門、正雜二行之中且拋諸雜行、選應歸正行、欲修於正行、正修二業之中猶傍於助業、選應專正定。」(全、52)

とある。かゝる實踐の綱規は導師の深心釋に依る正雜二行、正助二業の判別に基くのである。しかも信行の方規を示した導師の安心・起行・作業の起行の相として五念門を依用してゐるのである、勿論作願觀察の止觀中心でなく禮拜讚歎、憶念、作願、回向に順序をかへてはあるが、何處までも往生業の實修とし、深心を中心として正雜助正業を示し、願行具足せる念佛往生生活を勤むるもの之に配するに五念門を至誠心と回向發願心とに分別して三心具足の究極が稱名念佛の一行にあることを明示してゐる。



五念門の中、始めの三業は全く五正行に含まれるのみならず、至誠心は五正行全體の運用を支ふるものであり、別して深心の行として、行に就てそれが全くの往生の正行なるを信じての行であり、此の五種行の効果凡てが淨土願生のため、の回向發願行となるのであるから、五正行の中に餘す所なく五念門は流盡して居ると言へる。かく五正行より選擇本願念佛の廢立となる宗義の實踐は五念門の展開として五正行、五正行の導師施釋に基て「たゞ深く本願をたのみて口に名稱をとらふる、この一事のみ假令ならざるの行なり」と正助を批判して正定業を規定されたのである。かるが故に宗義の實踐としては展開を重ねてゐるが鸞師の五念門が始源をなすとも見られる。

## 八、結 語

淨土宗義史上支那に於ける淨土思想の始祖、鸞師の教義を概観したが特に淨土思想展開の上、佛の本願力を發見し之を體驗されて信心を重要視し名號を根本主體とし、淨土往生乃至早作佛の可能なることを明かにされたのは後世に影響する所多く、本願論は淨土祖師に傳承されて淨土教の中心思想として發展をなし、偏依善導の宗義もその始源又鸞師にありと言へる。特に龍樹の二道論を應用して淨土教の特相を主張するなど宗義發揚上不滅の偉功ありと言へる。特に淨土十念傳法は正に鸞師の説に基くので斯の方面に就ても考察すべきであるが今は割愛し、唯遠忌を邀へていさゝか淨土宗義と鸞師教義を概説して追遠の誠を捧げる次第である。

